

## 【タヴィストック・トレーニング及びフィロソフィーについて(1977)】 by Martha Harris

まずはタヴィストック・コースの歴史について、また急速に変動していった社会的枠組みの中で現在それがどのような位置づけにあるかについて語ります。更には、このコースが具現化していった背景にどのような抱負やら理念があったのかについても語ってまいります、それは尚も発展途上にあるわけですが・・・これから述べます見解についてはひとえに私個人に責任があるものとお考えください。これまでトレーニング・コースの内容並びにわれわれの教育方針については幾らか語られ、かつ論議されてきたとはいえ、かつてその概要の詳細についてまではついぞ語られたことはなかったのであります。

### ■コースの歴史[The history of the course]

そもそも【タヴィストック】のチャイルド・サイコセラピー(Child Psychotherapy)のトレーニング・コースは、1948年、ジョン・ボウルビー(John Bowlby)の指揮下に【子ども & 親たちの部門 Department for Children and Parents】において始まりました。彼は、クリニックという臨床機関で、非医師であるところの、子どもを個別にサイコセラピーできる専門職 personal practicing psychotherapy を育成する為の分析的訓練(analytical training)の必要性を考えたのであります。最初の11年間、統轄責任者は **Esther Bick**であります。彼女の指導方針は、まずは精確で詳細を極め尽くしたところの観察から学ぶということであり、そのレベルの高さを誇りました。そして、Mrs. Bickの退職後も、訓練生並びに教官たち双方にそれは引き継がれ、多大な影響を与え続けているといえましょう。

最初の何年間かは、このトレーニングへの応募者はごくわずかでありました。疑いもなく、それはまだ職業としては知名度が低く、その割には積極的かつ献身的熱意(commitment)が求められ、必然的に伴う甚大なる経費からして当然のことと考えられます。だが、最近の事情はかなり違ってきております。経費やら献身度が減ることはないのですが、志願者は増え続けており、われわれ側がそのすべてに応えるにはかなり難しい状況に至っております。【タヴィストック・クリニック】及び【タヴィストック・インステテュート】は拡張しつつあり、教師陣もその数は増えてはいるものの、正規の訓練を受けたセラピストになりたいという要望に応えるにはその受け入れをごく少数に限るしかないのが実情であります。

### ■コースの所属機関[the place of the course]

【タヴィストック】とは、組織媒体も違い、専門分野も異なる、多様な寄集めの機構といえましょう。クリニックそのものは、NHS(国民健康保険制度)の枠内で運営されており、これによってチャイルド・サイコセラピスト養成コース、さらには同じく精神科医及び心理職のための大学院レベルのコース、それからソーシャル・ワーカーの上級コースも、経済的に支援されていることとなります。しかしながら、現時点では、受講生各自に授業料を課すことを余儀なくされております。この他にも個人的負担として、トレーニングに規定されるところのパーソナル・アナリシス(personal analysis)があります。訓練コースの幾らかは【Tavistock School of Family Psychiatry and Community of Mental Health】によっても経費がまかなわれておりますけれども・・・

【タヴィストック】は、多くの学問領域にわたり、その目的も多種多様であり、それぞれが実にさまざまに異なる見解を有しているとはいえ、それでも究極のゴールとか信条(beliefs)においては或る一定の合意(consensus)があるといえます。それ故に一つの機構としての統一性を有しているといえましょう。そこではそれぞれ異なる専門分野がその目的を遂行せんとさまざまな試みをしておりますので、或る期間ここで学びそして働く人々にとっては、かなり広範囲に亘る経験の蓄積が期待されます。

ここでわれわれの一致した関心事と申しますのは、それは個々の人、家族そして社会に健やかな成長の促進をもたらすという点であります。この目的において、われわれは、病理に限らず、発達的变化をより可能にするところの状況やら条件(conditions)にも注目します。われわれは敢えてことさらに特権(privilege)を助長することには好みませんけれども、個々人それぞれの成長並びにその特異性に対して大いに許容的でありたいと考えております。われわれは或る意味、特権をいただく者として仕事上で得た知識や洞察をぜひともコミュニティ全体と共有してゆかねばならない、そういった責任を自覚しております。変化とは、個々あるいは小人数のグループの熱意によってことが始まり、個々の内なる心理そして対人関係性をじっくりと観察するプロセスによってこそ実現可能になるものとわれわれは信じております。この場合、そうした観察の質及び範囲を規定するものとは、根本的に精神分析に依拠するとの認識を致しております。精神分析は、観察者に自己自身を、そして内なる感情、動機づけ、逆転移なるものを深く吟味することを要請いたします。それらが実に己れの見るものを豊かにするばかりではなく、歪曲をもしかねないものだからでありますから・・・。

#### ■トレーニングの構成[Organization]

トレーニングは、前期と後期の2つに構成されておりますが、フルタイムの訓練生であれば最短にして4年を要します。しかしながら、それぞれ個々の状況からして、パートタイムで研修に関わることを希望するなり、或いは必要とされる場合には、4年という期間をはるかに超過することもありましょう。訓練生はそうした研修期間を経て修了しますと、【Association of Child Psychotherapists】の正会員として推薦されることになっております。教育は一貫してサイコセラピーという専門性をめざして舵取りされてゆくわけですが、初めの2年間はタヴィストック外の教育・福祉・医療などの現場でそれぞれにふさわしい業務に携わることが勧められます。

つまりのところ、訓練生は、子ども、家族、或いは青年期の若者らといった対象を相手に、さまざまな現場で役割を担うわけですが、この初めの2年間は、タヴィストックでの講義は夕方時間帯に設定されておりますから、必要ならばフルタイムの職業に就くことも可能でしょう。しかしながら大概のところ、それはあまり望ましくないかと思われます。この期間中、観察(observations)が課されますので、そのための時間配分もありますし、また記録を取る時間的余裕も必要ですし、同時に必要な読書の時間、それにセミナーにも参加しなくてはなりませんから、だいたい1週間に20時間ほどは十分に余裕がなくてはなりません。

訓練生は、この初めの2年間に就職先を自分の責任において見つけねばなりません。事業主には【タヴィ】での研修について予め説明されていることが奨められます。それから、しばしばわれわれの許に仕事の依頼が舞い込んでくることもままありますから、したがって訓練生に適宜そうした情報が伝えられる場合もあります。このコースの前期に訓練生が携わる職業とは、それぞれの経歴やら資格に依りましょう。将来としては、いずれタヴィストックの業務として外部機関と連携し斡旋を担うことが期待されますものの、タヴィ内でそれぞれの訓練生の個別指導教官やらスーパーヴァイザーの役割を担う者がタヴィ外での訓練生の仕事先に対して責任を負うことは、一切あり得ないものと考えております。

コースには、まずこの最初の時期に幾つか主要なるセミナーがありますので、それについてご説明いたします。

#### ■ワーク・スタディ セミナー〔The Work－Study Seminar〕

このセミナーの参加メンバーは、対象がそれぞれ児童、青年の若者、そして家族といった、さまざまに異なるセッティング(職場)で働いており、各自が順番に自らの仕事についての詳細な事例を発表します。これは、常にそれぞれメンバー自身とその‘クライアント’との相互的な関わりという側面が含まれております。この事例発表はグループ内で話し合われます。このグループを統率するのは、児童および青年期の若者らを対象に分析的なセラピイを経験したことのあるサイコセラピストですが、グループ参加メンバーそれぞれの職務上の役割を必ずしも経験したとは限らないのは申すまでもありません。

これらのセミナーではことさら技術面が強調され教えられるわけではありません。参加者たちは提出された資料を読み込んで、そこにおよそどういふ‘意味 meaning’があるのかを探索した後、描かれてある状況や事象にどう適切に対処するかを考え、かつ討議することが奨励されるのです。このセミナーで意図されますことは、われわれの知覚・認識力(perception)を鋭敏にすること、想像力を逞しくし、資料に記述されているパーソナリティの相互作用の潜在的な力動性をより深く把握することにあるのです。われわれの見解としては、感受性(sensitivity)及び自覚力(awareness)を培う教育とは、より経験を積んだ先輩格の同僚と共に論議を積み重ねながら、つまりそんなふうにして、個人について、またグループについても、それから自らの役割ならびに責任性についても綿密に学んでゆく、漸進的なプロセスとして考えているわけなのです。

そうしたセミナーでのリーダーの一人として、私が任務と考えますことは、提示された事例の詳細を可能な限り吟味し、どのようなことが問題となっているのか、その問題となる事態を抽出することにあります。これには少なからず時間を要しますし、また、セミナーの参加者それぞれがその場の状況に踏み込んで事態を把握し、かつ質問ができるようになるにも時間が掛かります。こうした際に質問された事柄が時として、発表者があまり重要視してなかったため提出資料の中には書き込まれていなかった、さらなる詳細を記憶に甦らせるきっかけとなりましょう。それから、こうした提示された資料の中で一見

煩雑としか見えない事象が、皆で考えを練り上げるなかで徐々に結びついてゆくにはさらなる時間が掛かりますが、そうすることで、参加者にとって事態がより真実味を持ち、意味深いものとなるということがあります。

ここで付け加えますと、提示された事例を読みながら、実際の現場にあっても、またセミナー・グループ内においても、そこで湧き起こってくる情動(emotions)にぜひとも注目したいものと考えます。さらに申せば、こうした情動こそが、目の前に提出されている事例資料を理解せんとすることに関連して何らかの意味を有するものと考えられるわけです。実際のところ、われわれのなかに喚起される情緒すべてが自ずとわれわれが感じるべくして感じているものかどうかはともかくとして…。このようにして、まずは己れ自身の感情(feelings)を大いに活用するということが奨励されるのであります。これらは想像的な感性には不可欠であり、かつ重要です。それ無しではいかなる人と人との関係性もいかなる仕事へ向けての態度もなんら深みの無いものとなりましょうから…。

逆に申しますなら、己れの内では喚起された感情のあるものとは、実際のところ子どもの側から伝えられたものへの真正なる反応ではなく、むしろそれはこちらワーカー側にある未解決な小児的な葛藤に関連した不適切な情緒のゆえに生じる場合もあると認めることは肝要であります。それらはワーカー側の心のうちの何かが投影され、子どもの真実語っているメッセージやその子どもの独自性に対する認識が歪められたものと考えられるのです。こうした投影(projection)が起きている状況ですと、いかにその子ども本人に個人的な意味合いで伝えようにも、結局はうまく通じない、得てして不適切になりがちに思われます。しかしながら、やがてセミナーの参加者にとって、認識(ものの見方)の歪みはわれわれ誰にも時として起こり得るものだということに気づかせられてゆくことは適切かと思われます。そうした理解を得るため、一つの可能性としては、絶えず検証を重ねてゆくことであります。投影は、問題となる事態に対し視座を変え、新たな切り口で吟味すると理解が得られることがあります。同僚と話し合うのでもいいですし、あるいは自問自答でもいいでしょう。さらには、パーソナル・アナリシスは勿論、訓練生の個人的な動機付けやら、対象に相対し感じる上での己れの能力を妨害し、遮断するものについて、よりいっそう深く吟味し得るための場であるといえます。

このように、職種の異なるセッティングでの経験をお互い交換し合うことは、セミナー参加者にとって、他の人が遭遇している困難に共感を覚え、かつその仕事に対して敬意を覚えることになりましょう。さて、ここで私は、過去5、6年間に小学校内において小グループの児童らと一緒に活動したという仕事内容なのですが、それを一つ例に挙げてお話してみたいと思います。

そもそもこの仕事は、幾つかの小学校の校長先生たちからの要望があって、それに応えたものであります。つまりのところ、普通のクラスの授業には付いてゆけない子どもらを集めて小人数のグループで見てもらえないかという依頼だったのです。行動面並びに学習面での困難を抱えた子どもたちが対象となりました。この場合のグループの責任者は子どもらと一緒にどのようなことでも有益と判断される

ことは何なりとしていいといった許可が与えられておりました。少なくともクラス担任にとっては、トラブルやら厄介の種であった一人二人の子どもと格闘する日常からちょっと一息付けるというものでした。このかなり自由でゆるい枠組みの中で、騒々しい手に負えない子どもらやら、始めは不活発で‘魯鈍’な印象が突如変貌して感情を暴発させ、破壊的行為に及ぶといった子どもらもいて、かなり困難を極めたものではありましたが、このプログラムに携わった多くの訓練生は、振り返ってこれをかけがえのない経験と見做し、そこから多くのことを学んだという次第なのです。そうした彼らにとっても、それに学校の教師たちにとってもですが、こうしたグループの子どもら、概して混乱を極めた、貧困家庭の子どもたちが多かったのですが、それがやがて情緒的かつ知的面においてもさまざまに成長してゆく姿を目の当たりにしましたから、それは大きな衝撃でもあり、かつ啓蒙的であったといえましょう。こうした子どもらは日頃から興味を持たれることや注目されることに対して飢餓感があつたといえましょう。この小グループ内では、普段どうにも容認されにくい彼らの行動が許容され、かつそれがコミュニケーションのより建設的な手段に転換される機会を得たことで、随分と落ち着きを取り戻したというわけなのです。

こうした少人数のグループですと、子どもたちは大人に対して深い密なる親近感やら信頼感を抱くに至ります。そして、幼少時以来の依存性、悲哀、喪失、嫉妬そして憤りといった、さまざまに熾烈な情動性を身近な大人のワーカーと一緒に語り合い、そしてそれらに耐え、なんとか切り抜けてゆくことが可能となったということになります。以前ですとただ馴れ合うだけの悪仲間につきずり込まれていた子どもらは、互に関心やら友好、そしていたわりを示すことを学んでゆきました。そうしたことが起こり得るとは、渾沌とした初期の段階のこうしたグループでは想像するのも難しいわけでしたが・・・。さらにはグループ内でもたらされたためざましい発達は必ずといっていいほどに、時としては劇的に、学校生活の他方面にも及んでまいります。

対人関係について申せば、これらの少人数のグループの子どもたちから学ぶことは極めて多いといえましょう。興味深いことには、それぞれの子どもが果たすグループ内での構成部分及びその役割は、個々の子どものパーソナリティ内にそのままそっくり機能していることが窺われます。こうした子どもたちのグループを体験することで、日頃子どもを個別に見ているセラピストにとっては、そのままその子どものパーソナリティのさまざまに異なった部分(different parts)としてリアルに描写し、語って聞かせることができますわけで、しばしば大いに助けになるといえましょう。

こうしたさまざまに異なる職場での仕事について話し合うセミナー(work-study seminar)は乳児観察(infant observation)と並行しております。それについては次にお話しますが、これら2つには相互に密で豊かな関連性(cross-fertilization)があります。将来、こうしたさまざまな職場での多様な経験で明瞭となった対象関係性やらそれら構成パターンと、それから乳児・母親・家族の観察において明瞭となったそれらとの間の繋がりをよりいっそう見極められるような統合的理論が導き出されることもいずれ可能となりましょう。それは今後のセミナー・リーダーの課題であります。現在のところ、このようにわれわれは機会が与えられる限りにおいていろいろ試みておりますが、いずれ訓練生はそれぞれに

経験の多様性をうまく活かしたかたちで、引き続き各自の専門分野へと進んでゆかれますことが望まれます。

#### ■母子観察セミナー〔the mother—infant observation seminar〕

このセミナーは、そもそも1948年にコースが開設された当初から**Esther Bick**によって始められました。現在タヴィストックでセミナー・リーダーになっておいでの教官たちのどなたも彼女のセミナーに参加し、かつ銘々が母子観察を体験しておりますわけです。こう申し上げますのは、パーソナリティの発達基盤について学ぶ上で、どれほどこの体験にわれわれが負うところが大きいのか、いかにユニークな方法であるかを認めているからであります。それだけではなく、この種の観察方法は、もしもそれが意味あるものとなるためには、ぜひとも経験を積んだ専門職の方々の援助を必要とすることを改めて強調したいからであります。

ごく一般的に見ますなら、小さな赤子の動きというのは得てして、当事者である母親以外には、ただ渾沌としていて何ら意味のないものと見られがちです。目の前に起きている出来事をよく見極め、その詳細を記憶するためには、赤子にごく接近しなければなりません。その折に心の内に喚起される場所の情緒的な衝撃(emotional impact)にも耐え、目の前に繰り広げられる事象の‘わけの分からなさ’からくる不安感とも格闘しなくてはなりません。そしてやがて徐々に‘わけの分かる’パターンが見えてくるのです。遠くから見れば、赤子は(或いは誰しもがそうでしょうが)他と似たり寄ったりということになります。。。

このセミナーは他の何よりも訓練生にとって、‘個という存在(being)’の価値というものに瞠目させられるという意味で重要です。そしてまた、そのお蔭で必然的にそれぞれが受容的な観察者(receptive observer)となってゆくことになるわけであります。実際のところ、観察するという以上にはまったく何ら義務はないのであります、むしろ行為化することを控えることを学ばなくてはなりません。まず母親たちには次ぎのようなことが尋ねられますでしょう。子どもが家庭の中でどんなふう to 育てゆくか、その過程を学ぶために、観察者がご自宅に週1回1時間程度の訪問をしても構いませんかどうか、よろしいでしょうか。そしてこの場合の観察者とは、児童専門のプロ(professional worker with children)であるわけで、もしかしたら自身が子どもを持つ親であつたりもするわけですが。。と、まずそんなふう to 説明されます。それから母親は、訓練生が通ってくる週ごとの観察の合い間に、何かしら赤ん坊に変化や進展を認められた場合にはぜひ情報としてお聞かせいただければ大いに助かるし、有り難いとも伝えられます。母親が我が子について折々に抱く想いやら感情を随時自由にお話いただければとても嬉しいということも。。そして観察者が注ぐ関心は延いては母親にも、赤ん坊の我が子を大きく育てゆくとする一個人(a developing individual)としてより注意を傾けんとするようになってゆくことがしばしば窺われております。

こうした体験をしますと大概の人が、赤子と母親にごくごく身近に相対することで、観察者自身の

幼少期に根ざすところの極度に強烈な感情を喚起させられることが往々にしてございます。いつも容易に自覚的にはそのように認められるとは限りませんし、それにもしもちょっと気づいたとしても、なかなか簡単には説明が付かないということがありましようが。明らかに、セミナー・リーダーの課題としては、そうした感情が、もしも己れ自身の中で、また他のセミナー受講生の中でも喚起された場合には即それを認めることが重要でありましよう。母親そして赤子の双方に対して、等しく感情を向けることが奨励されます。つまり、片方にのみ過剰に同一視しないようにということ。そのためにも、己れ自身の逆転移(counter-transference)をよくよく見据えることです。そしてそれを抱えんとすることであり、間違っても行為化するとか邪魔立てはしないように慎むのです。そんなふうになりますと、観察者は、赤子に対し責任を有する母親が甘んじるところの心的圧力(impact)を理解し得るものとして学んでゆくことでしょう。観察者は、もしかしたら母親の折々の変化とか傷つきやすさは、彼女自身に喚起された幼乳的感情からもたらされたものであると感じる場合もありましよう。母親の、赤ん坊そしてまたそのニーズに対する感受性とは、赤ん坊が暗中模索して手探りし、時には躓くことにも常に共鳴せんと心をオープンにする能力から来ていること、さらには、さまざまに赤ん坊から投げかけられるメッセージを腑分けしてゆくことも、適切に共感したり、またその場にふさわしい応答をしながら徐々に学んでゆくわけで、実にそうした能力から育まれることを、観察者は学んでゆきますでしょう。これは、母親がこれまでに予め学習していたこと、あるいはガイドブックにそう書かれているとか、誰かがそう言っていると、あるいは乳児心理学などでそう教えられているとか、それらを鵜呑みにすることでは決してないということなのです。

母親の総てが必ずしもこのようにスムーズに応答してくれるとは限りません。人によっては必要な学びというのはごくごくゆっくりと時間を掛けて会得されますわけで…。応答能力がどのようであるか、またどんな盲点を抱えているのか、母親によって実にさまざまでありますし、それもまたその時々で違うといえましよう。それはわれわれにしても同様なわけですが…。

セミナーでは、このようなパーソナリティの側面をじっくりと学ぶ機会を2年間に亘って与えられます。それぞれの赤ん坊の中にある発達への内なる促しを見るいい機会になりましよう。そうした力は各子どもによって違うにしても、本来どの子にも備わっているものであります。そして繰り返し目の前に展開される事象の流れを追って観察してゆきますと、子どもの中に対象関係を成立させようとする迫力、愛情、そして能力が徐々に育ってゆくのが理解されてまいります。このような方法で、訓練生は、将来セラピストとして患者に関わるべく自らが育まれてゆくためのモデル或いは資源としても、この経験を選択的に取り込むわけですから、実に得難い機会になりましよう。

観察の体験は、キーツの言うところの《今に耐えること(living in the question)》を教えてください。訓練生は、患者とともに居ながら、目の前に生じている事象の、ごく詳細がもたらすところの印象の意味することが明らかに見えてくるまでは苦闘をやめないことが肝心です。決して自分がよく分からないままに何らかの理論に飛びつき、それで事足れりとしてはなりません。‘赤ん坊なるもの’を子どもの中に、そして大人の中にも見るができるようになりますし、そしていずれ分析的セラピーにおいてはどの人

の中にもある、そうした‘赤ん坊の部分’に寄り添い、その阻まれている、あるいは歪んでいる発達を援助できるわけであります。次第に心の動きが見慣れてまいりますと、それが健康的な動きなのか、或はうわべだけの偽りの表面的な成長なのか、そうした違いもわかってまいります。そしてごく微細なる行動の指標やら情緒のサインの意味することに対してもより敏感になります。それらを充分考慮に入れることで、いずれセラピイに携わる際には、その仕事の質に奥行きと幅を拡げるでありましょう。

こうした観察を体験したことで、いずれは分析的セラピイにおいて、早計かつ不安を宥めるためだけの解釈をしたり、そうした不用意な介入をしてしまうことを避けることが学ばれるでありましょう。また、治療者としての熱意は当然ながら、そこにリラックスして、まずはじっくりと感じることを学び、そしてどの子の中にも潜在的にある、それはどの赤ん坊の中にもあるわけですが、成長へと促す内的衝迫(drive)をぜひとも尊重することが学ばれてまいります。決して成長は急がせられるものではありません。もしかしたら幾らかは促進されるとか、励まされたり、見守ってもらうことはできますでしょうが、無いところに新たに創り出すことは無理なのですし、ましてや強いられるとかということはありません。このようなことは、決して赤ん坊に無理に先走ってやらせようとはしない、賢明な母親を観察していれば、こうした感覚のいくばくかを掴むことができます。つまりは、どんなに良い母親だとしても、赤ん坊にフラストレーション(欲求不満)を味わせず育てるなど非現実的だということであり、従って、赤ん坊の今可能な範囲で自ら格闘してゆくことに任せてゆくしかないということをわきまえています。

このセミナーにおいては、その性質上、時として母親の‘あら探し’になったりする場合もあることを心に留めておくのがいいでしょう。(或いは、他の例ですと、他のセラピストとか或いは当事者の別の誰かということになりますが…)自分の方がうまくやれると内心密かに思うこともありましょう。こうした傾向は、何ごとにも病理を探したがる窺視症的なまなざしが背景にあるかとも考えられます。つまりは、何事に対しても共感的にではなく、批判的に見ようとする態度です。さらにはこうした傾向に対しての防衛もありましょう。それは母子に対する自己の何らかの投影同一視(projective identification)であったり、または理想化(idealization)であったりでしょう。いずれにしても、彼らがまさに今葛藤していること、もしくは葛藤できないためむしろ回避せんとしている困難に対して敢えて盲目的ままであろうとしているわけであります。精確さを要する観察に差し障りとなる、こうした事象は、時としてどのグループでも起こり得るといえましょう。それらはセミナーにおいて、話題として取り上げられ、かつ検討されねばなりません。他のワーク・セミナーの場合にも同じことが言えますが、訓練性各自が抱える内なる‘躓きの石’についてはいずれ十全なる意味づけがもたらされ、さらにはグループ内で彼らが活用されるかどうかは、それぞれ各自がパーソナル・アナリシスという私的な場でさらに熟慮を深めてゆく課題となりましょう。

最後にこのセミナーについてもう一言述べますと、観察された事象について話し合われるわけで、発表者の担当する責任ある仕事というわけではありませんから、基本的にはその報告については、詳細にというだけでなく、むしろ自由で、そしてより正直なレポートが求められるでしょう。誰しも臨床のケースを発表するセミナーやら会合などでは、提出する資料に、不備やら混迷やら間違いをどの程度



残しておくか迷いますし、あるいはそれで削ってしまうとか、さらには批判を最小限に封じるための体裁を整えてしまったり、誰しもがかなりのプレッシャーを覚えます。こうした非難を避けたいという希望にばかり執着しますと、相互に学びあうという機会が限定されましょう。誰しも、競争心やら、それに権威筋(それが誰であろうと)の眼に自分がよく見られたいという思いをまったく度外視することは無理でしょう。われわれ誰しもそのような気になりがちだと認めざるを得ません。しかしこのセミナーでは、観察の素材そのものに注意が焦点づけられますし、発表者個々の比較とか評価には関係ありません。もしそうだとしたら、そうした発表は正直さやら率直さというものとは掛け離れたものとなりましょう。

#### ■精神分析的サイコセラピーのトレーニング〔Training in psychoanalytical psychotherapy〕

このコースの中核を占めるのは、精神分析的サイコセラピーの技法の習得であります。決してそれが最終ゴールというわけではありませんが、訓練生にはトレーニング・ケースとして、3つの症例を担当することが課されます。幼児期の子どもが一つ、潜在期のがもう一つ、それに青年期のといった具合にです。セッションの回数は多くて週5回、集中的(intensive)と呼ばれるセラピーであります。この時期の訓練生の殆どはタヴィストック内で NHS に基づくそれぞれ振り当てられたセッションごとの採用(a sessional appointment)を得ております。しかしながら、タヴィストック内だけというのはごく僅かで、あとの殆どは他の臨床機関で働くこととなります。そこでは大概が常勤職を与えられていて、タヴィストックでのトレーニングの関連筋によって認定を得ております。このようにして、タヴィ内での限りあるスペースと有給のポストの枠を越えて人々を研修できるメリットがあるということになります。

上記の3つのトレーニング・ケースには、それぞれ3人の異なるスーパーヴァイザーが付きます。こうした取り決めは、それぞれさまざまに異なるセラピストの考えやセラピーの技法について訓練生が学べる、とてもいい経験となるものと考えられます。それからさらには、5回のセッションほどには集中的ではない、セッションの回数のより少ない症例を幾つか、子どもでもまたは青年期でもいいですが、診ることになります。それから親面談といったケースワーク(case work)の機会もありましょうし、もしも適切な場合には、それも分析的サイコセラピーへと発展することにもあり得ましょう。

ここでしばしばよく尋ねられる質問についてお話します。すなわち、分析とは、サイコセラピーとは何ですか？分析的な治療とは週4～5回のセッションをいうのですか？サイコセラピーという名目で同じようなアプローチをする場合には集中的(intensive)ではない場合をいうのですか？そうした質問であります。それぞれ任意に定義していいでしょう。分析とは精神分析的協会の会員が実践していると称するところの治療技法であるともいえましょう、しかしながらそれも実際のところかなり多様に亘っているといえるのでして。私自身は、‘精神分析的サイコセラピー’とは、われわれの【タヴィ】の訓練生が週5回セッションもしくはそれ以下の回数でおこなう分析的技法を、そのように称しております。内容的に申しますと、それは転移関係の解釈によって始動させ、セラピストの逆転移に私的な注意(private attention)を払うことでより意味を充実させてゆく〔メルツァー、1967〕、そうしたプロセスが展開されるころの分析をいうわけなのであります。そのエッセンスと申すものは、患者の全的な行動に細心の注意

が払われ、かつ解釈的な描写 (interpretive descriptions) が与えられることを通して、これまで未知であり容認しがたかった己れの心的領域が開示され、セラピストに順次手渡されてゆくことが奨励されるといった場 (setting) の供給にあります。これらは飽くまでもセラピストとの関係性において経験されてゆくものなのです。さまざまな子どもの内的事象が共に吟味され、そして理解され、統合されてゆくことが期待されるというわけです。このように簡略化された説明は、お分かりでしょうが、実に複雑なプロセスを単純化したものであることは申すまでもありません。

全般的に、【タヴィストック】のセラピストたちはこうした分析的技法を用います。面接回数 of セッションが週5回、4回、あるいは週1回でも…。セラピの週ごとのセッションの回数を決める基準は、かなり慎重に討議されますが、絶えず問題は残ります。ごく簡単に述べますなら、それはまったくのところ便宜上のことともいえるわけであります。もしもたまたまセラピストが集中的なケースに見合う時間の空きがあり、もしも親が子どもを毎回のセッションに連れてこられるということであったり、あるいは子どもや青年期の子どもが自分で通って来れるという動機付けが充分にある場合、こうした集中的な援助が提供されるでしょう。さらには、もしも患者の意欲が分析的セラピに携わることへの意欲ということでしたら、時折にそういう場合もありますわけで、それはチャンスが与えられるかどうかの判断基準としてはより真っ当かと考えられます。しかしながら、週5回のセラピを受けている子どもが、たとえそれ以下のセッションであっても著しく有益な結果をもたらすことができるという場合もありますし、その一方で、さまざまな理由で、週1回しか通えない子どもで、どう見てもそれではまったく不十分と思われる場合もあります。実際のところ臨床機関で働いたことのない人たちが一般的に考えてる以上に、こうした子どもたちは少なくないというのが私の見解です。

セラピストが訓練修了後に、集中的なケースを希望するかどうかは別として、週5回のセッションのトレーニング・ケースは必須であり、かつ重要な中核的体験であるという点は誰もが認めるところの一般的な事実であります。つまりそれを経験することによって、訓練生は分析的セラピにおいてセラピストに向ける幼児的転移の熾烈さについてよりはっきりと認識でき、確信を得るに至るわけであります。通例、転移現象は5回のセラピ・セッションと終末2日のセッションのお休みといった週ごとのリズムにおいて最も明瞭なかたちで表出されます。繰り返し周期的に起こるこうした事象はまずはセラピストと一緒にいる時間が充分であればこそなのであります。患者の内なる‘幼児的部分’がセラピストの注意力 (attention) によって抱えられているということを信頼できるようになれば、セラピの中断、つまりセラピストの不在に耐えられるようになるのです。そこには、かつて一緒だった (togetherness) という経験を保持できるようになってゆく様が窺われるでしょう。こうした状況は、訓練性がかつて乳児観察でおぼろろに感じ取っていた事柄を分析的セラピの中でじっくりと学ぶ可能性が与えられるということになります。それは即ち、幼児が以前に一緒であったという経験 (the experience of togetherness) を徐々に取り込み、そして同化することを通して、信頼し、愛し、そして無理なく母親から離れてもいられるようになるということでもあります。

もっと適切な言い方をしますならば、分析的セラピーとは、転移現象に焦点付けながらも、内在化のプロセスを阻み、不利に作用するところの心の要因について学ぶことに大きく関わっているということになります—‘learning from experience’ (Bion, 1962)。こうした‘学び’ということで申しますなら、常に患者ばかりではなく、セラピスト己れ自身も同じく含まれております。なぜならば、セラピーの技術とは、セラピスト側の弛まざる再吟味(re-examination)なしには習得し得ないからであります。

そもそも資源が極小で、かつ需要が甚大である場合、セッションの回数をどう決めるかの基準は、本人が果たして分析的治療に適當か否かをも含めて、サイコセラピストすべてにとって大きな課題となります。われわれは、われわれ自身が診断(diagnosis)並びに査定(assessment)に参加することがセラピストのトレーニングにとっての必須事項と考え始めました。それは、仕事上の幅を広げることでありますし、個々に潜在する発達能力について研究してきた、何年にも亘って培われた経験を生かしながらも、精神科医や他の同僚との協調関係を大いに活用し得ることにもなりましょう。

トレーニングの終盤において、もしくは資格取得後でも、サイコセラピストは【Young People’s Consultation Centre】で自ら相談を求めてきた青年期の若者らを対象にした短期間のコンサルテーションの仕事に就き、そこでスーパーヴィジョンを与えられる機会があります。そこではこうした仕事の可能性やらその限界やらについてさまざまな経験を得ることでしょう。

#### ■臨床症例のスーパーヴィジョン[Supervisions of clinical work]

トレーニングの前期には訓練生個々がスーパーヴィジョンを受けることは原則としてありませんけれど、特別な事情で要望がある場合には例外とされます。それでもし仕事上もしくは研修プログラムについて何らかの相談事がある場合には、訓練生はその折々に適宜個人教官(personal tutor)に赴くことになっております。ワーク・ディスカッション セミナー(work discussion seminar)に参加して、発表の機会を与えられることで得られる以上のサポートがぜひとも必要と判断される場合には、おそらく個別のスーパーヴィジョン(individual supervision)を申し出られることがあってもよろしいでしょう。コースの後期になりますと、訓練生は個別のスーパーヴィジョンに加え、週3回の症例セミナーのグループに参加します。そこでは児童、若者たち、そして親たちの臨床事例の資料が提示されます。そこで個々の訓練生が自らの症例資料を発表したり、又他の人の発表をも聴く機会を得るわけでありませぬ。

コースの後期に至りますと、研修生は自ら担当する症例について責任があると見做されますが、それは勿論それぞれの帰属先の直接の上司との連携においてであります。このトレーニングにおけるスーパーヴァイザーの役割とは、セミナー・リーダーとほぼ似通っておりますが、もっとセラピストの個人的な側面に踏み込んで指導することになりましょう。パーソナル・スーパーヴァイザー(personal supervisor)は、個々のセラピストが提示している事例資料についてよりよく熟考し、より深い理解が得られるように援助いたします。同様にして、セラピストと患者との間で、どのようなコミュニケーションが成り立っているか、あるいはコミュニケーションがうまくいっていないかなど、そうしたプロセスを克明にフォローしてゆくわけなの

であります。この場合、スーパーヴァイザーの意図と申しますのは、訓練生に患者のパーソナリティ及びその発達の様相についてとりあえずの概括的な青写真を心に描くことを援助せんとすることです。何らかの問題があれば、また別の視点で考えてみるように示唆するなり、そして時にはすべてが一見明瞭で適切である場合にしろ、そこに疑問を投げかけてみるなり、いろいろと試みるわけなのです。

教官という立場にありますわれわれとしましても、往々にして自問自答しております。訓練生にどういった事柄についてどのくらい語らねばならないと考えればいいのか？実際にセッション中に患者に解釈をすることを指導する場合、どの程度踏み込んで語ってあげるのがいいのか、もしくはどの程度自分流に考え纏めてゆくように励ますべきか？おそらくそれらいずれもが、それぞれ違った時点で適切でありましょう。訓練生が、明らかに注意を喚起されるべき資料を見逃したり、コメントするのを繰り返し避けてしまう場合であっても、何度も繰り返し資料そのものへ戻って新たなアプローチを試みるのが大事であります。同じ事象でも、違った場面状況で繰り返されるときなど、また違った新しい見地からそれについていろいろ検討することが可能となりますから。患者とともに分析作業している場合にも似て、人は誰も幾らかでも己れ自身の盲点を解明せんとしますと、まさにそうしたもののなのです。疑いなく、スーパーヴァイザーの態度は、訓練生・セラピストの症例そのものにと組む態度に影響しますでしょう。赤ん坊とうまくいっていない母親が自分の駄目さ加減を感じていて、そこに善意からであってもちょっと見下されたような助言を聞かされて、よりいっそう自分が駄目だと思い込んでしまうことがあるわけですが、これにも似て、セラピーに携わる上で自分の適性の無さを嘆き、葛藤している訓練生が、もしもスーパーヴァイザーにそうした感情やら葛藤などには何ら触れられず、ただあまりにも過剰なもってもらい解釈をされたりしますと、潰されかねない場合もあるかと思われまふ。

スーパーヴァイザーという存在はしばしば、内側にいっぱい知識を蓄えていて、必ずや‘模範解答’を知っているに違いないといった幻想を強化したり、またそうした幻想を次第に消え失せたりもできるものであります。もしもそこで、提出された資料に繋げて意味を掴む、真正かつ有益な営みとならず、ただ訓練生がまだ触れられていない、また‘うまく把握されていない’点を漠然とほめめかしたり、しかも役立つところの代替案を何ら提示しないままであれば、そうした場合には時として羨望やら適性の無さといった感情が訓練生にもたらされないはずはありません。かいつまんで申せば、症例資料に立脚して事と次第を明快にすること、もしくは別の視点から示唆を与えるのもいいですが、そうでなければ単なる非難に終わってしまいがちです。こうした事態とは、われわれが自らの心もとなさ(uncertainties)を引き受けることにしじっているからだと考えられます。つまりは、誰もが光を求めて、闇の中をさがしながらも戦い続けなければならないことを認め、それを受容するのに至っていないことになりましょう。

その一方で、訓練生の側に、もしも自分が間違いを犯すことに決して耐えられないということでしたら、それは問題でしょう。あれこれ人に教えられることや、他の誰かに指摘を受けることに神経過敏であるといった場合です。それはその人の個人的問題(personal problem)でありますから、その点については分析を受けて全力を尽くして取り組まなくてはなりません。スーパーヴァイザーはそのことをはっきり

見抜くことがありますから、斟酌を加えながら指導せねばならないことにもなりましょう。必ずしもこうした事柄に敢えて訓練生に注意を促すことがスーパーヴァイザーの務めだと思いませんが、もしそれがちよつと手に負えない場合でしたらばやむを得ないでしょう。われわれは教官の立場で、指導方法をよりよいものにしてゆく努力を絶えず怠りませんけれども、訓練生にしても、症例資料を提出するに当たり、どんなことを記憶し、かつどんなことを記録すべきか、そしてどんなことを質問すればスーパーヴァイザーに役に立ってもらえるものか、切磋琢磨することになるかと思われます。

#### ■レポート提出〔Written work〕

訓練生は、どのようなことを学びかつ教えられたかについて、自ら感想を述べるなり、評価する機会が与えられております。コースの初めの2年間では1年ごとにですが、観察及びそれぞれが携わった臨床体験について、レポートを提出することが要望されます。もしもトレーニングの後半、第2期目に進むとしますならば、さらに発表(presentation)が求められますし、また担当する症例についてのレポート提出が求められます。

#### ■理論的見地〔The place of theory〕

コース全体を通して、そこにはリーディング(講読)の機会もありますけれど、訓練生は多様な理論的アプローチやオリエンテーションに遭遇します。そして、それぞれ各自がいずれ己れの実践するところのセラピストと学習してきた理論との間に意味のある繋がりを見出せるように励まされます。

このコースで一貫して原則として学ぶのは精神分析理論であります。それはフロイトによって発展されたものであり、彼の臨床活動及び著作、そして彼自らの自己分析(self-analysis)を通して発展されたものです。因みに、この自己分析こそが、彼自身が挑んだ精神分析という研究領域、端的にいきますと、彼自身の中にそして他者の中に無意識(the unconscious)を探索するということですが、その精密さを深め、さらに広げていったといえましょう。これに付け加えますと、訓練生は殊にKarl Abrahamについて、さらにはMelanie Klein及びその後継者によって発展された理論を学びます。フロイトが大人の中に‘子ども’を発見したといえるなら、Melanie Kleinは、‘赤子’が子どもの中に、そして大人の中にもいることの可能性を明らかにしたといえましょう。彼女の業績とは、ひとの発達、実に対象関係を基盤にして、健康なかたちで進展してゆくといった認識をわれわれにもたらし、その点で貢献したことであります。そして勿論のこと、倒錯あるいは病理がその成長に起因し、それが歪められ、もしくは阻まれたものであるといった事柄についても、であります(Klein: Meltzer, 1973)。

タヴィストック・コースとは、必然的に、チャイルド・サイコセラピストを養成するクライン派コースとして知られております。しかしながらそうしたラベルを貼るとしたら、フロイトのパイオニア精神やら、それにメラニー・クライン自身にとっても、むしろ迷惑なことではないかと思われるのです。多くの歳月を経て、分析的セラピイに深く携わってきたわれわれの殆どは、精神分析の未来とは、どれほど貴重でかつ‘立派に’文書化されていたとしても、そうした理論を学んだり、それを宣伝やら普及することにあるのではなく、

むしろ観察がまさに為されてるところの状況に心を傾けんとする注意力 (attention) に拠ると感じるに至っております。そうしてこそ、人間性について学ばんとする訓練生にとって、理論が基礎となっているところのさまざまな現象を、他者の中にもそして自らの中にも認め、理解することを可能にしてゆくというわけであります。フロイト、そしてメラニー・クライン、そして他にもたくさんのすばらしい精神分析という科学もしくはアートへの貢献者たちの業績がなおも推進されますかどうかは、それぞれの訓練生が自ら独自に、心の内的世界及び外的世界との相互関連作用、無意識の意識的活動への影響といった、それら発見の道筋を、しっかりと我が事として生き抜けるかどうかによりましよう。その旅路は、以前には荒地でしかなかったところに横断を試みた人々が遺した地図を活用することで少しは楽になりましよう。しかし、地図をただ暢気に漫然と眺めているだけでは、旅路そのものの代わりにはなるわけはありません。そうした気持は、未知なる領域へとさらに踏み込むことを妨げるのみならず、既に開拓された領域においてわれわれに託されたものを維持してゆくことすらも困難にするであります。

#### ■ パーソナル・アナリシス [The personal analysis]

パーソナル・アナリシスは、コースの第2期目に進もうとする者には必須となります。訓練生は分析的症例を担当する一年前にはこのパーソナル・アナリシスを始めていることが求められます。既に志願する時点でパーソナル・アナリシスの経験のある人がおいでかも知れません。しかし訓練生になって第1期目ではまだ分析を受けることは要請されません。この時期は、教官と訓練生双方の間での相互的な診査ならびに選別の過程にあるからです。ここ数年の状況を振り返りますと、分析の体験が未だ無いとしても、大概の訓練生はある程度自分がこれから携わろうとする仕事がいかなるものかについて、かなりの想像力と洞察力が備わってくるものと考えております。多くの場合、自らの情緒的反応 (their own emotional responses) をじっくり吟味すること、決して非科学的として却下されるのではなく、むしろそれらを積極的に生かすことが励まされるとき、パーソナルな関係性を特徴とする、こうした領域での仕事の質も幅も大いに広げられ、かなりの進歩が期待されるものと考えられます。パーソナル・アナリシスを受けたことのない人が、実際に受けた経験のある人よりも人間性が豊かで感受性が鋭敏だということもありましよう。分析家は、決して人間を創ることはできないのです。つまり親が自分の子どもでも己れの望むようには創れないのと同じ意味合いで・・・。

しかしながら、たいそう優秀で、経験から広範にわたるさまざまな事柄を学べる人でさえ、己れ自身の中に未知なる領域を持っておりますから、それが絡んできますと経験から学ぶということが妨げられるということがあり得ます。こうした未知なる、もしくは疎外された領域というものは、分析によって発見され、やがて人格の中でよりいっそう統合されてゆくであります。分析を受けることは、セミナーやらディスカッション (討議) がそうであるようには訓練コースの中での必須科目というわけではありません。それは、むしろごくプライベートな事柄 (a private affair) というふうを考えられます。その目的なるものとは、訓練生がよりいっそう己れ自身を所有すること (possession of himself) にあるのです。希望的に申しますと、そこから精神的勇気が与えられて、以前には耐えられなかった不安感や心的苦痛 (pain) にくらかでも耐えられるようになると同時に、学ぼうとしている目の前の観察或いは経験の事象に対して

よりいっそう全面的に己れ自身を没入できるようになるということでもあります。

分析は、訓練生に分析的セラピイを共にしている子どもらに対して同胞意識 (fellow-feeling) を抱くことになるかと思われます。そうした感情の多くは、得てしてその成長の過程において潰されたり、妨げられたりしがちと考えられますが。発達が真に促されるためには、心的苦痛や恐怖がどういうことかを知りぬいている大人、さらにはとても大事なことです。その場合どう耐え抜いてゆけばいいのかをよく承知している大人からの同情心 (compassion) そして理解が不可欠なのであります。

パーソナル・アナリシスにおいて、訓練生は己れ自身の中の‘赤子及び子どもの部分’がいっそう深く経験されることが望まれます。それらを心の内に抱え、かつ育ててゆけるように一步一步丁寧に学んでゆくわけなのです。そして未だ心の隅にわだかまっている不平不満やら知覚の歪みなどを解決してゆくことです。そうして次第に、自分とよく似た問題を患者が抱えてる場合でもより率直に向かい合うことが容易になりましょうし、患者を自分とは違う一人の独特のパーソナリティとして相接することができるようになるはずで

#### ■セラピストに求められる資質 [Qualities desirable in the therapist]

良いセラピストの資質とは何かを規定することは著しく困難であります。過去において、コースへの訓練生の選抜についてはさまざまな方法を試みてまいりました。グループ別の手続きを取るやら、個別面談も、そして志願者を個人的に熟知しているどなたからかの推薦状をいただくといったことですが。これまでの結果から、そうした方法の有効性もしくは公平さについて完全に満足しているわけではありません。そういうわけで、当然ながらもこの選抜に付き纏う困難からして、敢えてわれわれはコースを前期と後期という2つに分けて、それぞれ志願者が‘自己選抜’ (self-selection) という機会を与えられることにしたというわけなのであります。このようにして訓練生になることを志願する者は、徐々に、自らが携わろうとする仕事はどういう性質のものかについて、トレーニングでどのようなものがもたらされるのか、自分がそれにどう反応するのかなど、徐々に現実的な経験を踏まえて会得してゆくわけでありませぬ。そうは言っても、残念ながら、そうした予備的な段階でさえそれなりに選抜があるのは止むを得ませぬ。チャイルド・サイコセラピイのコースへの志願者が年々増えているからです。一応ある程度は、来た者から順番にチャンスが与えられるという具合に対応しております。それで、たとえ今年は駄目でもまた来年にはチャンスが与えられるという順番待ちということがありますわけです。

志願者の多くは、まだ職業に就いていない20代前半です。他には職業的な経歴を持つ人たちがおられます。それまでに携わった仕事から芽生えた関心をさらに延ばしてゆけるものとしてこのトレーニングに期待を抱いたというわけです。どのグループも、このように背景のさまざまに違う、年齢差も異なる人々で構成されておりますから、訓練生各自はそうしたグループ・メンバーから何らかの利益を得るものと思われます。例えば、現時点で申しますと、人文科学系 (the humanities) といった、メンタル・ヘルス (mental health) 以外からの参加者が含まれているということがありまして、実に多士済々の顔

ふれというわけであります。因みに、想像的な文学(imaginative literature)を専攻した教育的背景をお持ちであります場合には、多くのアカデミックな心理学では非科学的と却下されるところの知覚閾(a dimension of perception)を広げることに、むしろ大いに優れた力を発揮するものと考えております。トレーニングは、心の内界(inner world)における感情、想像力、そして価値観といったものを真に現実(reality)として深く認識することであります。それこそが精神分析が重要視するものに違いありません。そしてそれに支えられてこそ精神分析は、行動主義者の描写するところのより表層的分野に陥ったり、あるいはタルムード様の戒律および理論を巡っての無味乾燥な議論に終始するということから免れ得るものと思われまふ。精神分析の未来とは、感情と想像力を秘めた内的世界(the inner world of feeling and imagination)が科学的な研究課題であり、かつ真に科学的に描写し得るものだけのことの揺るぎない信念に依っているといえまふ。

職業(profession)が人にとって重要となるのは、己れがその仕事に献身的に勤しんでいるというだけでなく、その人が働くセラピイの現場に己れの人生をとおして蓄積された経験から身に付いた聡明さやら知慮をもたらすことができているといった意味でも、それがその人自身の生きた中核となっていることなのであります。私的な存在(private existence)であつてこそ、外的ならびに内的にもいづれにおいてもですが、経験することの個性的な豊かさ(individual richness)が派生するのです。そのことが、セラピイ患者のコミュニケーションのあり様そして行動のもつ微妙な陰影について、より豊かな感受性と精確さでもって理解することができるようになります。それは心と心との出逢いをもたらすといえまふか。以前習い覚えて引き出しに貯め込んであつた解釈から引っぱり出しての説明(explanation)とは全然違ふわけでありまふ。

これと同じ意味合いで、セラピストの仕事の質が問われるわけです。肝心なのは、プライベート及びパーソナルな生活においてと同様に、自らが仕事そのものの中で息づいており、それによって豊かに養われているといった感触を抱いているかどうかなのであります。長い目で見て、もしも二人の人間が接触して、もしもその双方どちらにとつても益があるとは言えないのなら、基本的にその関係性は有益かどうか疑わしいといえまふ。しかしながら、チャイルド・サイコセラピストは、患者からすぐさまに満足を求めんとすることがあつてはなりません、むしろそれを慎み、しばし待つことも可能な能力が備わっていなければなりません。セラピスト自身および子ども双方の内にある、接触やら理解を妨げる、そうした傾向を心の内側でしっかりと抱えて、かつ苦闘し続けてゆかねばならないのです。経験から学べるようになるために、かつ又そこからの知慮を有効に活かし、自らにより耐えんとするようにと他者を援助するためには、ある程度の知能(intelligence)は必要でしょう。通例では、学位取得がその証明になりまふ。しかし知能が高いということだけでは充分ではないのです。それを使う方法ならびに動機付けがきわめて重要です。ある程度、われわれ誰もが知能を使いまふ、我々自身を、また外界をどうか御するために、そして己れ自身の矮小感やら不適切さを感じないですむために・・・ただ、他人を犠牲にしてまでもわれわれ自身を誇示せんとするために使うとしたら、それはむしろ由々しき事であり、問題があるといわねばなりませんでしょう。



チャイルド・サイコセラピストは、己れの卑小さ(feeling small)および無知(in the dark)に耐えられる力がぜひとも必要です。なぜならそれこそが子どもがしばしば感じるところだからです。そしてこれこそ、われわれの中の‘子ども’(the child in us)が、もしも世界に直面し、そこに潜む危険に対してと同様、この世のあらゆる不思議(wonder)やら冒険(adventure)に尚も果敢に挑み続けてゆこうとすれば、しばしば感じない筈のないものであります。

セラピストの私生活、そしてプロフェッショナルな職務は、互いに益しあうことが必要でありますけれども、時として互いに邪魔しあうことがあります。例えば、現在のところ、チャイルド・サイコセラピイを男性にとっても満足に値する職業として見做す機運は高まっておりまして、そうした志願者が増えているのも事実です。ですが、子どもや若者らを相手の仕事というのはやはり女性によりアピールするようであります。女性、たぶん結婚しているか、或いはこれから結婚し、子どもを持つようとしている女性たちに…。しかしながら、自分自身の子どもを愛しているということだけでは充分ではありません。他の人の子どもらにも向けられるほどに十分な感情やら寛大な思いやりが必要なのであります(この場合、他の人の子どもとは、深層心理においてはその当人の‘母親の赤ん坊’を表象しているわけですが…)。時として、自分の子どもがまだ小さい折には、情緒面での持てる力(emotional resource)を他の子どもらに向け発揮するということは難しいかも知れません。しかしながら、そうした惜しみなく与える愛というのも、究極のところそれが仕事ということであれば辛うじて可能でなくもないでしょう。でもそれだけでは決して十分ではありません。結局のところ自分の患者に対して抱く関心にしても、もしも彼らに専念すること(preoccupation)が排他的で、かつ熾烈である場合、つまり他の子らの存在を無視するといったほどにそうだとしたら、それはよろしくはないでしょう。この場合の‘他の子ら’とは、即ちわれわれの特殊ともいえる注意力(attention)、それがどれほど不完全なものであろうとも、それから逸れた、何ら益を享受することのない子どもたちを意味しているわけですから…。

もしもアート・サイエンス(art-science)としてのサイコセラピイの有益性が分かち合われるとしたら、個人と同様、広く社会についても関心が払われなければなりません。分析的なサイコセラピスト(analytical psychotherapists)としてわれわれは、それがいかに稀有なものか、そして時間と金銭面においてこれほど高価な教育的資源が供するなり、もしくは供されていることを鑑みれば、もはや仕事(task)というばかりではなく、それを恩恵(privilege)と考えるべきであります。従って、もしもわれわれがそれほどに恩恵を受けてきたとしたら、われわれが本質的にひとの成長を促すものとするところの視座が他の人にとっても何らかの励ましになるのではないかと考えるのは(特に子育て真っ最中の人たちにとって)義務(obligation)とは言えないでしょうか。こうした理由で、訓練生はこのトレーニング期間中に、或いはその直後に、【タヴィストック】のなかで社会的及び教育的分野での専門職のための教育的もしくはコンサルテーション(teaching or consultative)のプロジェクトに参加することが奨励されます。多くの人が教育の現場に携わる教師たちのためのコースに参加し、小さなグループの中でさまざまに討議が行われておりますので…。

## ■トレーニングの基本理念〔The philosophy of the training〕

私としましては、このコースを徒弟制度のように、ただ弟子が師匠をそっくり真似るように指導されるものとは考えておりません。たとえ教官たちがどれほど秀でたものを持っているとしても…。ただそれを内面のパーソナルな発達、そして対人関係上の進展といった側面から、これを教育の一つの機会と考えてもらいたいです。そこでは、訓練生は己れ自身についての内省的観察、それからセラピイと一緒に協同作業する患者たちについての観察から大いに学ぶように奨励されるのであります。いずれそれら観察したものを精神分析的理論によって系統立てて纏めてゆくことが援助されましようが、精神分析技法の枠内でどう動けばいいのか試行錯誤しながら、それぞれが己れ自身のセラピイのスタイルを演繹してゆかなくてはなりません。

われわれとしましては、内的心理的 (intrapsychic) な発達と、対人関係的 (interpersonal) な家族及びグループでの関係性との繋がりを精査するべくアプローチをいろいろと試みてまいりました。個々の子どもが、さまざまなものを内側に摂り入れ、同化し、そうして内的に育てゆくことによって成長してゆくということがどの程度起こり得るのかを見極めたいと考えているわけであります。それはそもそも同化し得ない人物やら知識へと自らを投影することによって、うわべだけのもっともらしい体裁を飾ろうとすることとははっきりとした違いがあります。即ち、そうした違いとは、摂り入れ同一視から進むところの3次元的な創造的成長、それとは逆に2次元的な社会化、もしくは投影同一視に留まるところの‘おとなぶること’のいずれか、そういったところであります。この場合の2次元的な社会化とはいうなれば‘他人の靴の中’に潜り込むことであり、その一方、投影同一視に留まって‘おとなぶること’とは、うわべだけにしがみつくと不毛な擬態であり、物体化した見かけ倒しというわけであります〔Klein, 1946; Bick, 1968〕。

われわれの教育方法とは、既に述べましたように、本質的に少人数のセミナー・グループそして個別のスーパーヴィジョンであります。これらは、訓練生にそれぞれが研究せんとしている対象と自らとの間で生じる相互作用の詳細について、じっくりと本腰を入れて観察してゆくことに全力を傾注してゆくことを目的としております。このコースの意図の一つは、訓練生の抱くところの不確実感 (uncertainty) に耐えるべく、その能力に挺入れすることであります。それに耐えて踏ん張り、じっくりと熟考し、そして自らの内に渦巻く逆転移を大いに活用することであります。そうすることで、認知的なコミュニケーションについてと同様、情緒的にも又感性がいっそう鋭敏になるのです。その目的とすることは、セラピイという実践においてまずは応答をし続けてゆくことであります。たとえそれが最終的な解答かどうか確信が持てないとしても…。とにかく学んでゆくことの希望があれば、患者からの助けを借りながらも、尚も進んでゆく方向性をいずれ見つけてゆけるものだからであります。こうした患者への態度は、解釈 (interpretation) のかたちに表れてまいります。つまり目の前で起きている事象を精確に描写し、データをよく纏めてゆき、さらなる問い掛けを志向し語りかけてゆくというわけであります。決して会話の流れを断固抑え込むような説明 (explanations) の類いであってはなりません。

理論的講義及びセミナーでの討議で取り沙汰される理論(theories)は、何事かを絶対視したり、最終案としたりするためではなく、概観するのにただ便利だからという意味で言及されるものと考えております。それらは観察した事象を纏めたり、名づけたり、一般化したりする方法に光彩を添えるものともいえますでしょうし、一見渾沌とした経験に何かしら秩序をもたらすでありましょう。だが、飽くまでも新しいデータを受け入れるために心の内に余白やら自由が残されてあることが肝要であります。

トレーニングの終盤において、訓練生はやがて修了書が与えられ、サイコセラピを開業する権利を与えられるわけですが、それで‘資格づけされた’という感情を抱くことがないように、もしくは自分が今や方法論や技法で武装され、他のトレーニングや技法よりも上手だと過信することがないように、そのように希望いたします。何かしら確かに手応えのあるものを学んだというふうに思っていたきたい。だが、もっと大事なことは、自らの内の不確実感にどのように耐え、困難な課題をどのように切り抜けるかを学んだということなのです。人間の本質について、その限りなき多様性の不思議さに対し、尽きない驚異を抱くところの深い感性(a deep sense of wonder)をいつまでも堅持していつまでも欲しいのです。それから付け加えれば、セラピで出会う患者たちに対して大いに同胞意識(fellow-feeling)を抱くことであります。これから尚も経験を積まれて、引き続き心の機能において分裂し、もしくは抑圧されている側面を探索してゆかれるようにと願っております。それはつまりのところ、葛藤する心の痛みにどう耐えるかということになりますが、骨の折れる経験を切り抜けることで生じる希望によって辛うじてそうした苦痛が緩和されるということもありましょう。

コースを卒業した訓練生は、セラピの対象の年齢層を拡げ、成人のクライアントを持つようになっております。コースに在籍中においてもますますその傾向を増しております。

われわれは、パーソナリティの発達を、家族、学校、さらには社会といった領域を広げて、その問題点をさまざまに検討しております。セラピストとして分析的治療に携わるわれわれ、又それを受けている分析患者たちの特権的な恩恵(privilege)について、局外の人たちが往々にして抱くところの憤り(resentment)というバリアーを打ち砕くために何事かを為すことができればいとわれわれは希望しております。これらバリアーを思い起こしますと、已むを得ないとしても、分析的治療を必要としていながら、実際に援助を受けられない多くの人たちに対してわれわれとしては責任を感じるわけなのであります。

われわれは、分析的サイコセラピ(analytic psychotherapy)のトレーニングとは修了すればそれで終わりというものでは決してなく、むしろことの始まりとして考えております。つまり、個々の人が、そしてその対人関係性が無限定な多様性そして複雑性へ向けて、さらなる探索が進められてゆくための拠りどころ(foundation)になろうかと考えられます。分析的セラピの流れが今後とも多方面によりいっそう深くそして広く浸透してゆくことが必要だという考えを抱いておりますわけです。なぜならばその治療的な価値というだけではなく、人間の関係性(human relationship)を巡ってのあらゆる学問にとって必ずや資するところのある、豊かな影響力を有するものと信じるからであります。

## ■修了後のこと〔Post-graduate developments〕

われわれのコースという存在は、精神分析の発見に負っています。どんなに開業心理臨床家たちが誤りを免れないものであっても、その意味するところは、あらゆる人間における自己実現、そして又その真実を探究せんことに本質的に関わっているのです。精神分析的方法を通してトレーニングを受けた者の誰しもがいずれ試みる教育ならびに臨床の質とは、自らの心の内でそうしたことに尚も弛まず奮闘し続けてゆけるかどうか、さらには日常で携わる臨床で対象とする患者たち並びに共に働く同僚の中にも又それが浸透してゆきますかどうか、究極的にはそれ如何に依ると考えられるのです。それは、それぞれが精いっぱいベストを尽くすことによって辛うじて生き永らえてゆくでしょう。より卓越した権威によってもたらされた教義に従うということではいけません。また、ただ親を喜ばすだけの子どものようにではなく、真に青年期の子どもが危機的な状況をくぐり抜け、もがきながらも己自身の心(mind)を、アイデンティティを、また生きてゆく己れ独自のスタイルを見出すように、であります。そのためには己れ自身を、親から教えられたこともまた同様に、疑問視しなくてはならないのです。いずれは吟味に充分耐えるだけの価値観や経験を実践的に会得する最善の方法を見つけがために、であります。即ちそれが己れの愛するものを尚も促進させるなり、かつ守り抜くことにもなるのです。

こうしたことを述べながら、ふと思ひますに、孤絶して生きられる人とか、自らの経験という光(light)に即して物事を思惟するなり感じたりすることに充分自信がある人などは、実に稀有な人であろうということ認めねばなりません。物事の判断の質とは、真実か虚偽かというはっきりとした区別に基づいて、選択的に心の内に内在化する能力が反映されます。大概のところわれわれにとって、内なる力(inner strength)によって強化されたところの自立心に至るまでには多くの時間が費やされるものであります。われわれは得てして葛藤することを諦めてしまい、安易にも‘十戒’と同価値なるものに甘んじて落ち着くこととなります。それで、取り敢えずは神を表象する何か、もしくは権威と呼ばれるものに対して(畏怖される或いは崇敬される、そのいずれでもある場合もありましょうが)、少なくとも自らが背いてはいないということが分かれば、事を済ませたつもりになれるというわけであります。

大概われわれは、トレーニングを修了後、そして精神分析的セラピストとして開業できる‘資格づけ’がされた後であっても、援助、サポート、そして何らかの刺戟を必要とします。これは、必ずしもさらなる分析を受けることを意味しません。それは寄生的な誘惑(parasitic temptations)といわざるを得ません。われわれは、むしろグループという擁護してくれる存在が必要です。そこでは年齢も経験も異なるさまざまな同僚たちとの討議が可能でありますでしょう。そのようなグループでは、互いに情報を交換し合い、共に学びあい、成長し合うことになるのではと思われるのです。間違ってもそれは互いに監視したり、あるいは裁いたりということではあってはなりません。もしそうであれば、アイデンティティと自己責任へ向けて格闘する上で往々に犯されるところの過誤を受容し、互いに成長を促すための人的資源(resource)となり合うのではなく、一群の青年期の子どもたちに時として窺われるように、ただ互いに制限(restriction)を加えるだけの‘足の引っ張り合い’といったものになりましょう。

分析的セラピーでは、セラピストはその立場上、必然的に、成長を阻害しているところの関係性やその心の構成的要因に絶え間ない接近を余儀なくされております。これらと悪戦苦闘する中で、セラピー患者からの欲求不満、苦痛、そして時には憎悪や非難といった投影 (projection) を我が身に浴びることに耐えねばなりませんでしょう。強情で言う事を聞かない、問題のある子どもを持つ親たちのように、セラピストもまた‘隣人’、即ち職場の同僚からの批判には傷つきやすいものです。プロフェッショナルなグループとして、われわれの健康と精力を維持するためには、われわれそれぞれの仕事への献身度とともに、自己吟味の能力が問われるものと考えられます。譬えれば、われわれが家事全般を、それも決して終わりはないわけですが、ひとまず秩序を保つという任務を背負い続けられていることで始めて良き隣人として感じられるというのですが、それはわれわれの同僚に対しても基本的に同じであります。セラピーという本質的に個人的であるところの仕事にはグループでの解決は望めません。さらには、この分野なりの問題があります。他でもそうでしょうが、プロフェッショナルなグループがエリート主義者にもならず、また異端狩りもせずして、尚も団結心を維持するのは難しいといえましょう。

サイコセラピストが立ち向かう問題となる事柄は、その経歴のそれぞれ異なる時期によって多少違いがあるといえます。臨床家であり、かつ教官としても、われわれは歳を重ねてゆくうちに、若い同僚や訓練生と出会うこととなります。そうした状況は、子どもらが大きくなって、そして挑戦してくる時期になれば、誰しも中高年期の親達が脅かされるにも似て、ある種の不安感情をかもし出すものであります。そうした脅威に対峙して、得てして追従する者やら賛美者を周りに集めたり、彼らを取り巻きとして利用してさまざまに保身を固めることで、己れの内なる不安感につっかい棒をすることがあり得ましょう。将来を巡っての不安感に変化を恐れますでしょうから、そうした保守的傾向を募らせることになるわけですが、そうした傾向とはなかなか己れ自身では気づかないということがあるように思われます。

サイコセラピーに携わり、われわれが日々引き受けざるを得ない心理的要求 (psychic demand) と申しますと、自己満足 (complacency) 及び自己正当化のための批判 (self-righteous criticism)、それに無秩序の渦巻き状態の狭間にあって、どう舵を操るかということであり、それはとても難しいことなのであります。しかしながら、もしわれわれが敢えてこうした困難な要求を引き受け、敢然と立ち向かうことが出来るとしたら、歳を経ながら尚もセラピーに携わることは個人的な意味合いでも十分に報われるものと思われまし、そして精神力やら知恵・分別にも常に資するものがあるといってよろしいでしょう。われわれがどこまでも‘型どおり’といった精神分析およびサイコセラピーに墮することがない限り、‘期待という敵なるもの the enemies of promise’ に屈せず、絶えず格闘を続けてゆくことでありましょう。無論のこと、‘敵なるもの enemies’ とは己れ自身の内にあるわけですから…。そうであればこそ、かつてシェイクスピアが熟知していたように、《死は内的な世界において打ち負かされ、不滅の命を勝ち得る》ということがありはしませんでしょうか？ (ソネット; 64)。

【出典：《The Tavistock Training and Philosophy》(1977)；

『Tavistock Model』 edited by Meg Harris Williams 2008. Karnac Books】